

アサド体制崩壊とトルコへのインパクト

新井 春美

50年超に渡り父子2代でシリアを統治してきたアサド体制は、ついに2024年12月に崩壊するに至った。「アラブの春」が発生して以降、シリア国内では民主化を要求する人々や、諸外国の支援を受けた反体制派やイスラーム過激派を含む諸勢力がアサド政権と、あるいは反体制派間で、戦闘を繰り広げてきた。一時はアサド政権がこれらを抑え切ったかのようには思われたが、実は国内各地で散発的な反体制活動が続いていたという。

反体制派の主流は10月には攻撃の準備を整えていたが、シリアとの対話を試みていたトルコが攻撃を控えさせていた。しかし、シリアとロシアがシリア領内からのトルコ軍の完全撤退を要求、これはトルコへのシリア難民の流入やPKK（クルディスタン労働者党、トルコや欧米諸国がテロ組織と認定）の活発化につながるとして、トルコには受け入れることができない要求だった。トルコはもはやシリアとの対話は不可能だと判断して反体制勢力に攻勢のゴーサインを出し、イスラエルとレバノンの停戦が発表されると反体制勢力は即時行動を起こして各地を制圧、アサド大統領はロシアへと逃れた¹。

アサド体制崩壊により、最も利を得たとされるのが隣国トルコである²。まず、トルコ国内にいるシリア難民がシリアに帰還する機会が生じた。アサド政権が崩壊してから5日間のうちに7600人がシリアに帰還している³。400万人近くのシリア難民はトルコがEUに睨みを効かせるための外交カードとしての使い道はあったものの⁴、相当の財政負担にもなっており、社会サービスの圧迫も各地で見られるようになった。この数年は反難民の集會が起きるようになったほか、選挙の争点になるなど大きな課題となっていた。

次に、クルド武装組織を潰す機会を得たことである。シリアのクルド武装組織 YPG（クルド人民防衛隊）と SDF（シリア民主軍）は PKK の一派とされるが、IS（「イスラーム国」）掃討作戦ではアメリカ軍の援助を受けて活躍するなど、存在感を示してきた。またトルコ・シリア国境付近は元々クルド系住民が多く、アサド政権の混乱下、シリア側にクルド自治地区を設置するのに成功している。トルコにとってシリアのクルド勢力の台頭は、自国内の PKK を勢いづかせるとして看過できないことであり、シリア領内に越境しクルド掃討作戦を続けてきた。12月24日には、トルコが支援してきた SNA（シリア国民軍）⁵や HTS（シャーム解放機構）といった旧反体制派は解散し国防省の下で統合することで合意したが、自

治地域の継続を望む SDF はこの合意に加わっていない⁶。またシリア北部で SDF と SNA の衝突が発生したと報道されている⁷。こうした衝突の発生は新体制成立の障害となりうるため、シリア新体制とトルコによって共同の対クルド勢力軍事作戦が実行される可能性もある。

さらに、これまでアサド政権の後ろ盾となってきたイランは傘下組織のヒズボラなどがイスラエルによって大きな打撃を受けシリアどころではなくなり、ロシアはウクライナで手一杯である。アメリカのトランプ次期政権は中東には積極的な関与をしないと示唆しているところから、今後のシリアに関してはトルコの役割や存在感はさらに増すことになる。

しかし楽観はしてられない。まず、シリア新体制が安定するののかという大きな懸念がある。「旧」反体制派も一枚岩とはいえない。権力闘争やイスラーム過激派の台頭、国民間での報復合戦などが懸念される。さらにイスラエルは、シリア軍の兵器類が「テロリスト」に渡るのを阻止するためとしてシリア領内を繰り返し爆撃、1967年にシリアから奪い取ったゴラン高原への入植拡大を決定⁸するなど、シリアへの介入を進めている。シリア国内が不安定化するようなことがあれば、再びトルコに難民が押し寄せる可能性もある。シリアが戦争状態に陥って 10 年以上となり、トルコでの生活が長期化しトルコ社会で生活基盤が出来上がった者や、トルコ生まれトルコ育ちのシリア人も少なくない。彼らはシリアに帰還するのか、不明である。

次に、クルド勢力とイスラエルの関係である。イスラエル外相が、クルドはイランやトルコの抑圧の犠牲者でありイスラエルはクルドとの関係を強化する必要があると述べる一方、クルド側もイスラエルとの友好関係を強調しつつ支援を求めている⁹。すなわち、イスラエルとクルドがシリアにおいて共闘する可能性も捨てきれない。これはトルコにとっても阻止したいシナリオである。

アサド政権の崩壊はひとつの区切りとはなるだろうが、多くのアクターが入り乱れ複雑化したシリアの前途は多難であり、トルコにとってもこれからが正念場であろう。

¹ Ömer Özkizilcik, “What does Turkey gain from the rebel offensive in Syria? “, *Atlantic Council*.

<https://www.atlanticcouncil.org/blogs/menasource/syria-turkey-rebel-offensive/>

ロシアのラヴレンチェフ・シリア担当特使は、トルコはシリアにおいて本質的に占領軍

であり、軍が撤退するまで正常化は実現しない。トルコから軍撤退について確固たる保証を得ずにシリア政府が対話に応じるのは難しい、と述べた。

Bir Bün, 15.11.2024. https://www-birgun-net.translate.goog/haber/putinin-suriye-ozel-temsilcisi-turkiyeyi-iscalci-gibi-davranmakla-sucladi-576205?_x_tr_sl=auto&_x_tr_tl=ja&_x_tr_hl=ja&_x_tr_pto=wapp&_x_tr_hist=true
アサド大統領は、トルコがシリア北部から軍を撤退させることが両国間の関係正常化の条件であると主張していた。 *Global News*, December 3, 2024.

<https://globalnews.ca/news/10900242/syria-civil-war-advance-turkey-us-talks/>

² Anne Chaon, “Turkey could benefit from rebel offensive in Syria: experts”, *Al Monitor*.
<https://www.al-monitor.com/originals/2024/12/turkey-could-benefit-rebel-offensive-syria-experts>

³ *Hürriyet Daily News*, December 15 2024. <https://www.hurriyetsdailynews.com/7-600-syrians-returned-via-turkish-borders-since-assads-fall-203633>

⁴ トルコと EU は、欧州への入国を試みた不法移民難民をトルコへ戻し、トルコ国内の難民キャンプにいた難民をその代わりとして欧州へ入国させるという取り決めを結んだ（2016年3月）。こののち、上記の取り決めと同時に約束されはずの EU からの支援金が滞ったことへの不満の表明として、トルコはギリシャとの国境を解放して難民を欧州に送り出し EU に揺さぶりをかけた。

⁵ トルコは HTS の国境付近の地域での影響力と、アサド政権とシリア北東部を支配するクルド人勢力の両方に対する対抗勢力としての HTS の役割を認識し、交流してきた。 *Arab News Japan*, 10 Dec 2024. https://www.arabnews.jp/article/middle-east/article_135909/

⁶ 産経新聞 2024/12/25

⁷ <https://abcnews.go.com/International/wireStory/kurdish-led-forces-push-back-turkish-backed-syrian-117081306>

⁸ *BBC News*, 16Dec 2024.

<https://www.bbc.com/news/articles/cz6lgl128xo?time=December%2016th,%202024&mpid=349>

⁹ *Middle East Eye*, 11 November 2024. <https://www.middleeasteye.net/news/israel-foreign-minister-calls-kurds-minorities>

The Jerusalem Post, December 9, 2024. <https://www.jpost.com/middle-east/article-832732>